

## キレる生徒についての一考察（第2報）

## A Study of Short-tempered Students (part 2)

青木 憲樹

## 要 約

中学生・高校生の校内暴力がほぼ横ばいとなり、小学生の対教師暴力が前年度比38%増加していることが公表された。中学生は23,115件、高校生は5,150件である。以上が文部科学省の調査結果であるが、依然として校内暴力は多いと考えられる。

校内暴力の要因の一つとして、「キレる」ということが注目されるようになってきている。本研究は、「キレる生徒」の要因を明らかにすることが目的である。高校生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、親や他者の過干渉が大きな要因であることが明らかとなった。生徒がキレないためには、生徒自身の感情の自己コントロールが必要であり、親や教師は生徒を学業成績だけで評価しないことが大切である。

キーワード：校内暴力、キレる、過干渉

## はじめに

2005年度の文部科学省の調査では、中学生・高校生の校内暴力がほぼ横ばいとなり、小学生の対教師暴力が前年度比38%増加していることが公表された（平成18年9月13日付朝日新聞）。小学生の校内暴力の件数は2,018件と3年連続で増加している。それに対して、中学生は23,115件、高校生は5,150件である。以上が文部科学省の調査結果であるが、依然として校内暴力は多いと考えられる。

最近では、校内暴力の要因の一つとして、「キレる」ということが注目されるようになってきている。「キレる」とは、「正常な判断力を見失い、自己抑制力がきかず、キレると重大な事件に発展する<sup>1)</sup>」。キレるというのは、自分の中でタガが外れたり、不愉快な刺激を受けた場合、抑止力がなくなり、理性的な行動がとれなくなって発作的な情動がおこる現象に対して使われている表現である。

キレる要因として、「①普段の生活の中で自分の欲求不満をどのように表現し、主張するか身につけていない。②情報メディアへの過度ののめり込みから、仮想世界と現実とを混同する。③家庭での過保護、甘やかしすぎで、主体性や自主性が育てられていない。④学校生活での自己表現や活躍の場が確保され

ず、教師の指導に反発する<sup>2)</sup>」などが挙げられている。生徒がキレるのは、様々な要因・背景によって、生徒自身はその状況を解決不能と思い込み、どうしてよいか判らなくなるからである。すなわち、生徒がその状況を解決不能であると思い込んでしまうことが問題である。

本研究では、現在の高校生を対象にして、小学校・中学校・高等学校を通して、なぜ生徒が「キレる」のか、「キレる」相手は誰か、アンケート調査を実施した。また生徒が「キレる」ことに教師が大きく関わっていると考え、教師にどのような気持ちを持っているのか調査した。

## 方 法

対象：G県女子高校3年生44名。

調査方法：質問紙調査。

調査内容：①キレた時期、②キレた相手、③キレた要因、④キレた時相手に感じたこと、⑤キレることの解消法、⑥教師に感じること、⑦教師に対する期待、について自由記述法で回答を得た。

## 結 果

①キレた時期については、中学生の時が最も多く全体の67%を占めた。次いで高校生の時14%、小学

生の高学年の時14%と多かった。②キレた相手については、母親が44%と最も多く、次いで父親が29%と多い。母親と父親を合わせると全体の約73%を占めている。

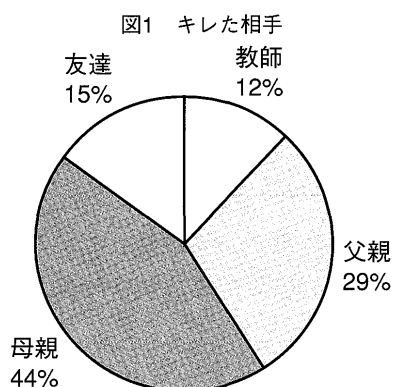


表1 調査結果

質問事項	回答内容	
①キレた時期	小学校 (低学年)	1
	小学校 (高学年)	6
	中学校	29
	高等学校	7
	無回答	1
②キレた相手	父親	13
	母親	19
	先生	5
	友達	6
	無回答	1
③なぜキレたと思いますか (キレる要因)	ムカついたから	12
	親がムカついたことを言ったから	8
	ストレス	6
	いらいらしていたから	4
	反抗期だった	3
	腹が立ったから	8
	無回答	3
	④キレた時相手に感じる事	ウザイ
死ぬ		5
ムカついた		7
顔も見たくない		3
キレていただけ		5
腹を立てていただけ		4
無回答		8
⑤キレることの解消法		ストレスをなくす
	干渉しないで欲しい	18
	心に余裕を持つ	2
	感情をコントロールする	3
	価値観が違うからなくなる	4
	他人に期待しない	2
	分からない	2
	無回答	6
⑥教師に感じる事	勉強を教えてくれる大人	16
	進路の相談にのってくれる	8
	身近な他人	4
	親しみをもてない	2
	無回答	2
⑦教師に対する期待	親身になって相談にのって欲しい	13
	平等に接して欲しい	8
	期待していない	11
	受験に役立てばいい	4
	無回答	8

キレることの解消法の回答で、親に干渉しないで欲しいという回答が多い。親の干渉がなくなればキレないと考えていることが分かった。これは親や教師など他者が干渉し過ぎることがストレスとなっていることを示している。キレる前に、何らかのストレスが蓄積されていたり、親や教師の過干渉により、イライラしたり、ムカついていることが分かった。心に余裕を持つようにしたり、自分の感情をコントロールできればキレないと考えている生徒もいた。また、教師に対しては、勉強を教えてくれる大人、進路の相談にのってくれる、ととらえている。教師に対しての期待は、親身になって相談にのって欲しい、平等に接して欲しい、という期待のある反面、期待してないという意見もあった。

## 考 察

### (1) キレる生徒の特徴

#### ①自分絶対視思考

キレる要因として、「ムカついた」、あるいは「親がムカつくことをいった」、という回答が45%あった。ムカつくとは、「怒りがこみ上げてくる」ことである。また、キレた時、相手に対して、「ウザイ」、「死ぬ」、「顔も見たくない」と感じた生徒が多い。この思考は、自分がどのように感じたか、自分がどのように判断するか、自分がどのように行動するか、全ての論理の出発点が「自分」にあるということである。価値判断の基準が「自分」にある。自分を絶対視するため、排他的思考に陥ってしまう。自分さえよければ、他者はどうなってもかまわないという思考につながる。

自分が絶対ということは、自分が感じたこと、つまり主観的感情が全て正しいということになる。自分が絶対ということは、思考も感情も「自分」を基準にするため、自分が感じなければ、他人が傷ついても、苦しんでも、自分が感じないから、関係ないという結論になってしまう危険性を含んでいる思考である。

#### ②解決不能の思い込み

キレた時、「キレていただけ」「腹を立てていただけ」という回答が20%あった。キレたその時点で思考がストップしてしまう。思考回路が、ショートしてしまった状態になるのである。物事を多面的にとらえることができなため、単一思考に陥りやすく、複眼的思考ができない傾向にある。物事を単一にとらえ、多面的なとらえ方がなかなかできないのである。自分の置かれた状態を、すぐに解決不能と思い

こんでしまうのである。解決不能と思い込んでしまうと、キレた状態のままになってしまうのである。

### ③「怒り」をコントロールする力が弱い

キレることの特徴の一つに、自分の感情の中に「怒り」が生じたとき、その怒りを抑制することができない傾向がある。怒りには、常態的怒りと突発的怒りが考えられる。この突発的怒りがキレることにつながりやすいのである。キレる生徒の特徴の一つに、この突発的「怒り」をコントロールできないことがある。

キレる生徒は、この「怒り」が顕著な場合、重大な事件に発展する可能性がある。

## (2) 親や教師の特徴

### ①いつまでも子ども思考

キレる背景に両親や教師の過干渉が大きな影響を与えていることが明らかになった。親は自分の子どもが、年齢と共に成長していることに気がつかない。小学校低学年と同じように過干渉・過保護を継続するため、子どもの芽生えてきた自主性を奪うのである。

親が過干渉・過保護を続けると、子どもの自由な発想を奪い、自分を表現できないことが欲求不満となり、大きなストレスとなる。子どもが小さい時は、両親や教師の価値観や期待を従順に受け入れることが、よい子どもであった。しかし、成長してくるに従い、自立心が芽生え自主的な行動をとるようになる。特に中学生の時期にキレる傾向が多いのは、両親や教師の一方的な評価や期待と自分の価値判断や自分の将来への希望が乖離し、そのことが大きなストレスとなっていると考えられる。

### ②おいつめ思考

アンケートによると、キレた時、ムカついた、イライラしていた、腹が立った、という回答が多い。子どもに突発的な怒りの感情が発生するのは、親が子どもの感情を逆撫でしたからであると考えられる。成績不振を気に病んでいる子どもに対して、親が勉学を強いるのは逆効果である。傷ついている子どもに、親が追い打ちをかけるような言動をしないように注意しなければいけない。それが子どもを追いつめることになる。親が子どもを感情的に追いつめれば、子どもは精神的に余裕のない状態となり、キレることにつながるのである。

## 今後の課題

### (1) うまくキレる

人間が社会生活を送る上で、何らかのストレスを

受けざるをえない。同じストレスを受けても、キレる生徒とキレない生徒がいる。同じような状況にあっても、一方で感情的にキレて、他方でその状況を何とか乗り切ろうとするか対応は別れる。その違いは、その物事や状況に対する考え方・捉え方の違いによると思われる。非常に困難な状況に陥ったと本人が捉えた場合、その困難な状況が自分の能力では解決不能であると判断した結果、自分ではどうにもならないので、その困難な状況から逃れるためにキレると考えられる。この困難な状況が永遠に継続すると思いきこんでしまうところに問題の根源があると考えられる。このような状況に陥った場合、どのように対応したらよいのであろうか。

アンケートの回答の中には、社会で生活する上で何らかのストレスを感じざるを得ない。だから、キレることはなくなるといいう意見があった。確かに、キレる要因の一つとしてストレスがあり、ストレスがなくならないかぎり、キレることは防止できない。

とするならば、やはりうまくストレスを発散する方法を考えることが重要である。つまり、うまくキレることである。自己表現をうまくするということでもある。

他者を批判することではなく、自分はこのように思う、あるいは自分にはこう見える、というように、まず自分の思考を客観的に分析し、自己表現を工夫することによって、キレようとする選択肢を選ばないように自己コントロールすることが必要であると考えられる。

### (2) 社会化（価値基準の多様化）

価値判断の基準が自分のみで、しかも少なく単純であるために非常に短絡的な結論を導きやすい。そのためには、社会化（socialization）が必要である。社会化とは、「個人がある社会の文化（知識・技能・価値・態度・行動様式など）を身につけ、その社会の一員へと形成されていくこと<sup>3)</sup>」である。すなわち社会のなかになじむ、社会に適応するということである。社会とは多数の人間の集合体であり、人間は一人ひとり価値基準が異なり、価値基準が異なれば価値判断が異なる。価値基準は人間の数と同数あると言っても過言ではない。社会化とは、その多数の価値判断に適合するということである。他者の価値判断の中には、自分の価値判断と全く異なることも多数ある。社会化とは、自分と異なる価値判断にうまく適合するということである。

社会化は学校教育の課題でもある。学校は、集団生活を通して、社会性を養うことが目的の組織である。対教師暴力が増加している傾向は、社会化教育が困難になってきているということを示している。社会化教育は、様々な形で学校教育に取り入れているが、更に生徒に社会性が身につくような工夫が必要であると考ええる。

### (3) 人生の意味の再確認

人生とは何か。これは非常に難しい問題である。しかし、あえて人生とは何か考えておく必要がある。最近「犯罪の低年齢化<sup>4)</sup>」傾向がある。低年齢の時から、命の大切さや人生とは何か、きちんと考える必要があるのである。

ギリシア哲学では、人間の究極目的は、幸福であるとする。しかし、この幸福とは、ポリス全体の幸福であり、あらゆる善目的の究極にポリス全体の幸福が存在するというのである。また、仏教では、人生は全て苦であるとい基本的認識が全ての出発点である。

現代の子どもは、人生は幸福でなければ意味がない。そして、幸福になれないのならば、生きる価値がないと考えているように思われる。このように、人生のあり方・幸福のとらえ方が表面的で深みがない。しかし、人生は単純な快楽の追求ともいえる幸福感でとらえきれものではない。

学校教育の課題としては、この人生に対する認識をさまざまな形で提供する必要があると考ええる。

### (4) 生徒を学業だけで判断しない

アンケートの結果、現在の高校生は教師に対して、勉強を教えてくれる大人、進路相談にのってくれる大人という意識をもっていることが明らかになった。

教師に対する期待としては、「親身」になって相談にのって欲しいと考えている。それに対して、教師に平等に接して欲しい、期待していないという回答がある。

以上の結果、考えられることは、教師は生徒を学業成績という一面的なとらえかたをしている傾向が強いのではないかということである。これは親も同じことが言えると考ええる。

中学校で校内暴力が多いということは、高校受験を控えているため、生徒を指導する場合、学業成績が非常に大きな位置を占めざるを得ない状況であり、それが生徒にとって大きなストレスとなっていることを示していると考えられる。

学校教育の基本は、教科の学習をして、その進捗

度を上げるということであるから、教師は学習効果をあげる努力をしなければいけない。しかし、学校教育の目的は、学業成績を上げることだけではない。集団行動を学習することや、生徒一人ひとりの個性を伸ばすことも重要な教育なのである。教師は、生徒を多角的・複眼的にとらえる必要があるのである。

## 引用文献

- 1) 安藤忠彦他編：新版現代学校教育大事典2，ぎょうせい（東京），2002，p429
- 2) 安藤忠彦他編：新版現代学校教育大事典2，ぎょうせい（東京），2002，p429
- 3) 安藤忠彦他編：新版現代学校教育大事典3，ぎょうせい（東京），2002，p431
- 4) 安藤忠彦他編：新版現代学校教育大事典5，ぎょうせい（東京），2002，p433

## 参考文献

- 東洋他編：発達心理学ハンドブック。福村出版（東京），1992。
- 伊藤順康：自己変革の心理学。講談社（東京），1990。
- 岩波書店編集部編：教育をどうする。岩波書店（東京），1997。
- 遠藤辰雄編：セルフ・エスティームの心理学。ナカニシヤ出版（京都），1992。
- 大田堯：なぜ学校に行くのか。岩波書店（東京），1995。
- 影山任佐：普通の子がキレる瞬間。ごま書房（東京），1998。
- 加藤諦三：人生の悲劇は「よい子」に始まる。PHP研究所（東京），1994。
- 梶田叡一：教育評価。有斐閣双書（東京），1992。
- 河上亮一：学校崩壊。草思社（東京），1999。
- 佐伯眸：「学ぶ」ということの意味。岩波書店（東京），1995。
- 坂口哲司編：生涯発達心理学。ナカニシヤ出版（京都），1995。
- 塩見邦雄：こどもの学習意欲をたかめる。北大路書房（東京），1994。
- 関口礼子他：新しい時代の生涯学習。有斐閣（東京），2002。
- 田井康雄：新実践教育原論。学術図書出版社（東京），1995。
- 高木秀明編：高校生の心理②深まる自己。大日本図書（東京），1999。

- 高橋一郎：耐性教育「生きる力」の復活。田研出版（東京），1998.
- 富田富士也：「キレる」前に気づいてよ。佼成出版社（東京），1998.
- 富田富士也：「いい子」を悩ます脅迫性障害。ハート出版（東京），1996.
- 永崎一則：人をほめるコツしかるコツ。PHP文庫（東京），2002.
- 日本経済新聞社編：教育を問う。日本経済新聞社（東京），2001.
- 船井幸雄：船井幸雄の「人財塾」。サンマーク（東京），2003
- 北星学園余市高等学校：学校の挑戦。教育資料出版会（東京），1997.
- 松原惇子：そのままの自分でいいじゃない。PHP文庫（東京），1995.
- 宮本哲也：強育論。ディスカバー・トゥエンティワン（東京），2004.
- 山崎房一：子どもを伸ばす魔法の言葉。PHP文庫（東京），2000.
- 村山士郎：事件に走った少女たち。新日本出版社（東京），2005.
- 村山士郎：なぜ「よい子」が暴発するか。大月書店（東京），2000.
- 若き認知心理学者の会：認知心理学者教育を語る。北大路書房（東京），1993.
- デボラ・J・ステイベック，馬場道夫監訳：やる気のない子どもをどうすればよいか。二瓶社（東京），1990.
- カレン・E・ワトキンス，ビクトリア・J・マーシック，神田良，岩崎尚人訳：「学習する組織」をつくる。日本能率協会マネジメントセンター（東京），1995.
- 和田修二：教育の本道。玉川大学出版部（東京），2002.
- 和田修二：教育する勇氣。玉川大学出版部（東京），1995.
- 和田修二：教育的人間学。放送大学教育振興会（東京），1998.

## **A Study of Short-tempered Students (Part 2)**

Kenju Aoki

### **Abstract**

School violence increased by investigation of Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology was published. It increased in particular that a primary schoolchild used violence on a teacher.

Short-tempered attracts our notice as one of the factors of school violence. The purpose of this study is to clarify factors of short-tempered students. I carried out a questionnaire for a high school student. As a result, it became clear that excessive interference of parents and another person was a big factor. It is necessary for short-tempered students to control their feelings. It is important that parents and teachers do not evaluate students only by an academic achievement.

Keywords: School violence, Short-tempered students, Excessive interference